

少年は見たB29撃墜現場を！

松岡 勲

はじめに

昨年十一月、和歌山県田辺市龍神村にお住まいの古久保健さんを訪ねた。古久保さんにお会いするにあたり、長年大阪で教科書問題を一緒に取り組んできた相可文代さん（『ヒロポンと特攻太平洋戦争の日本軍』（論創社）の著者）の強いお薦めがあった。相可さんは、「古久保さんは松岡さんと同様にお父さんを戦争で亡くされていて、顔も見てもらっていない。根っこで繋がる共通の体験がある。きつといい出会いになると思う。」と言い、私の著書『靖国を問う 遺児集団参拝と靖国合祀』（航思社）を古久保さんにわざわざ送られた。私は『父の遺した椅子』（ドッドウイザード）をお送りした。まもなく古久保健さんは『轟音―その後―』（日本機関紙出版センター）を送ってくださった。やりとりが始まった。最初にその『轟音―その後―』の私の感想（健さんへの手紙）から始めよう。なお、ここから古久保健さん「健さん」と呼ぶのは、おつれあいの久代さんがそう呼ばれていて、その人間関係を大変好ましく感じ、憧れに近い感覚を持ったからだ。私もいつの間にか「健さん」と呼んでいた。

『轟音―その後―』の感想

ご著書『轟音―その後―』を読み終わりました。

一九四五年五月五日に墜撃されたB29搭乗員たちの死に遭遇された原体験からご著書は書き始められていました。古久保さんが小学校二年生時に、墜落場所で、兵士の死体に投石する。それはお父様の中国における戦死という悲しく辛い体験が元にあると思えました。

その加害体験の内省から、一九三八年に中国山西省で戦死したお父様の姿を辿り、現地にまで行かれた。（私は父の戦死した武漢近郊には残念ながら行っていません。）

そこから戦時中の戦争推進体制を究明される。古久保さんのその執拗な取り組みに私は引き込まれました。

さらにアメリカの被害者遺族探しとその出会いまでの長い旅をされる。その記録を用いて大阪芸術大学生が卒業制作として、映画「轟音」を完成。その経緯に魅せられました。

ご著書のなかに「戦争をなくし、平和を希求する」古久保さんの一貫した歩みに感動しました。

ご著書を読んでいて、大変驚いたことがありました。それはお父様が行かれて、お亡くなりになった中国の地が私の父が行軍した地と重なることでした。

またご家族のなかで、戦争の被害をうけた叔父様、伯父様のお話や一九四四年に和歌山護国神社遺児参拝に参加されたお姉さまのことなど、色々とお聞きしたいことが次々と浮かんできました。

ご著書を読み、ぜひ古久保さんにお目にかかりたいと思いましたが、ご健康上のことがありますので、ひとまずは手紙のやり取りや奥様の携帯電話を通じてお話を伺いすることから始めたいと思っています。

あらためて一月に入りましたら、お電話いたしますので、よろしく願います。

龍神村に古久保健さんを訪ねる

昨年(二〇二五年一月一日)、JR紀勢本線(きのくに線)紀伊田辺駅で、古久保さんご夫婦、古久保健さんと久代さんお目にかかった。穏やかで人に対する包容力の感じられる、それでいて強い意志力のあるご夫婦であることを感じた。

龍神村は、かつて日本の和歌山県日高郡に存在した村で、同県の中央東部に位置し、龍神温泉の村として知られていた。二〇〇五年(平成一七年)五月一日に田辺市、中辺路町、本宮町、大塔村と新設合併して(新)田辺市となった。田辺市の広域地名として大字に「龍神村〇〇」の名称を残している。村の約七〇%を標高五〇〇メートル以上の急峻な山岳が占め、日高川が村内の主要な地区を流れている。

山深い龍神村に久代さんの運転する車で向かう。急峻な地形をフルスピードで進む。久代さんの車がなかったら、私は龍神村をとうてい訪ねることができなかったろう。健さんは戦後一貫して平和を希求する道を歩まれたが、車の中で交わしたおふたりとの会話から、久代さんは、長きに渡る健さんの活動に伴走、さまざまな形で支えて来られたのだらうと想像した。龍神温泉で一泊し、帰りは路線バス(龍神線)で紀伊田辺駅まで戻った。二日間、健さんと久代さんに大変お世話になった。

B 29 撃墜の目撃

一九四五年五月五日、古久保健さんは撃墜されたB 29を目撃。死んだ若い米兵に投石した。国民学校二年生だった。投石したのは、大人に使喚されたこともあるが、空襲への恐怖と米軍への憎悪が強まったからである。

B 29は、以前は夜の空襲のみだったが、四五年頃になって、朝、夜と一日に三回も飛来。空襲警報が頻繁に出されるようになった。この時撃墜されたB 29は一機。七名の戦死、四名の生存が確認されている。

このうち二人が七月二〇日に大阪の信太山で銃殺刑に処せられた。残りの二名のうち一名は、八月一日、敗戦の日の正午過ぎに信太山で処刑された。残り一名は、記録では行方不明扱い。(毒殺、病死、脱走、医療ミスなど)となっている。

健さんが当時目撃したB 29の撃墜の記憶について、先に紹介した『轟音―その後―』から引用する。なおこれからの話は同書の引用と一月一日、一六日の聞き取りによる。

当時の和歌山県日高郡上山路村の西ノ谷一五八番地へ、B 29爆撃機が墜落した。日本の戦闘機「紫電改」の機銃攻撃によって炎上し墜落した。この時、健さんは思わず拍手しながら、「勝った！バンザイ！」と叫んだ。

その時、健さんは昼の準備でカマドに火をつけようとしていた。姉が勤労奉仕から帰ったので、姉を頼りに昼食を待っていた時だった。柱時計が一時を告げたところで、大きな爆音、腹の底に響くような爆音と軽い機銃の連続音に驚き、健さんは家の外に飛

び出して空を見上げた。いつも見ている飛行機よりも大きな機体が、飛ぶという感じではなく、ゆったりと浮かんでいるように見え、今にも落ちてくるのではないかと思った。

大きなアメリカの飛行機の周りを旋回しながら機銃を撃つ小さな日本の飛行機の胴体と両翼には日の丸が見えた。怖かったが懸命に声援を送った。空には、薄い紫の煙と小さな火花が交錯し、軽い機銃音が遅れて聞こえてきた。機体が煙に包まれたのを確認したのか、日本の戦闘機はゆっくり旋回しながら態勢を整え、飛んできた方向へ飛び去った。

その煙の中から、最初に黄色い落下傘が空にぽっかりと浮かび、四角い荷物のようなものがゆらりと降りてきた。続いて煙の中から白い落下傘が一つポカリと浮かび出て、搭乗員が足を動かして降下してきた。その姿が見えた瞬間、周辺に大きな爆発音が轟いた。機体が三つに分解し、ゆっくりと煙の塊とともに分かれながら、落ちてきた。それがわが家の上に迫った感じで、急いで裏山の防空壕へと駆けだした。その途端、向かいのおじさんの声がした。「坊っちゃん、そこへ落ちるぞ！」

姉が先に走り出し、その後を健さんは走り出した。走っている間に、破片が舞い落ち、山に突き刺さり、「もうあかんかも・・・」と必死だった。防空壕の入り口で空を見たら、もう飛行機は見えず、裏山の上空に真っ黒い煙がモクモクと立ち上り、銃を撃つような音と大きな爆発音が連続して聞こえた。

搜索と遺体の回収、埋葬を村あげて

墜落現場では、区長、区長代理と村会議員が指示を出し、警防団員が中心となって遺体及び遺品（ベルト、カバン、くつ、衣服等）の回収作業が始まった。当時の回顧録によれば、「事件後は見学者、関係者の現場訪問があり、その対応に夜も昼も振り回され多忙を極める状態であった。」と述べている。しかし、そんな中でも一刻も早い遺体の埋葬という処置に苦勞した様子が窺われる。

そして実際の処置は、墜落機体の上流側の山裾に大きな穴を掘り、遺体の各部位を確認しながら、左右の胴体、左右の手足や胴体、小さい部位まで持ち集められ、遺体毎に確認した結果、頭部は皆無だったが、四遺体が復元されたと聞く。先に機体で落下傘を押さえられた完全遺体一体と合わせて五遺体を確認された。

五名の遺体を埋葬、盛り土をし、その上に雑木が一本立てられた。

これは作業に当たった区民が、山から手頃な雑木を切り取り、盛り土の中央部分に立てたものである。墜落死した四名の米兵に對しての心優しい弔いと追悼の行為は、戦後の殿原地区民の慰霊と追悼の道筋を指し示していた。

健さんが遺体に投石した記憶

健さんがこの時代の記憶で一番心にのこっているのは、兵士の遺体に向かって小石を投げつけたことだと言う。落下傘で降下し、機体の傍であお向け状態で亡くなっていた兵士に向かって小石を投げつけた。大人（警防団員）の指示があったとは言え、そ

の時は、憎い敵兵への思いがあつての行動だった。その投げつけた石を握った指の感覚と兵士の体に当たった、鈍く嫌な音が随分後々まで残り、成人した自分が「命を大事にしましょう。」と言う言葉の虚しさを強く感じ、「死者にムチ打った者が言えるのか」と、色々思い悩んだと言う。

その兵士が、一九歳のヘッサーさんだったことが五〇年後に判明する。(後に話題になるアメリカ兵士の遺族探し、トーマス・クロークとは別人) それは健さんの戦後の歩みと物語だ。

健さんの生まれた時代と戦争

健さんは、一九三七(昭和一二)年一〇月六日生まれ。お父さんの名前は古久保薫で、一九一四年(大正三年)三月生まれ。お父さんの戦死は一九三八年(昭和一三年八月一七日、山西省の戦闘で前頭部後頭部穿透貫通銃創にて戦死。父は機関銃射手で、貫通した敵弾は背後の兵士にも貫通し、両者とも戦死した。

ちなみに、私の父、松岡徳一が一九三七(昭和一二)年九月に一回目の召集で中国に派兵され、行軍した場所は、健さんのお父様が一九三七(昭和一二)年八月に二回目の召集で派遣された場所と重なる。その戦闘は大原攻略戦だ。健さんのお父さんはその時戦死し、私の父は帰還できたとの違いがあるが、健さんが生まれた時、お父さんは戦地において、その後戦死されたので、健さんはお父さんに顔を見てもらうことがかなわなかった。それは私の誕生と父の戦死とまったく同じだ。

古久保薫さんの「軍隊手帳」から

一九三四(昭和九)年二月一日和歌山連隊に入隊

一七日平城出發

一八日より平安北道江界郡に到着、国境警備隊に服す

一九三六(昭和一一)年一〇月二五日六一連隊機関銃隊に入隊

一月二二日召集解除、現役服役二年陸軍歩兵上等兵として一九三一(昭和六)年から一九三四(昭和九)年の「事変ニ於ケル功ニ依リ金五拾五円賜ル」

一九三七(昭和一二)年七月二七日動員下命

八月二一日大阪港出發

二三日釜山着、連隊編成後、鴨綠江通過

(この間の一〇月六日に健さんが生まれる。)

一月一一日より大原攻略作戦に参加
一九三八(昭和一三)年二月より黄河追撃戦

六月二六日より山西省の戦闘に参加
(その後さまざまな戦闘に参加)

八月一七日午後一時から午前一時
戦闘中戦死、二五歳

(引用は他の部分もふくめ古久保健著『轟音―その後―』(日本機関紙出版センター))

家族と戦争

おじいさんの誠三さんは一八八四年（明治一七）生まれで、父の戦死の後、健さんを育ててくれた。幼い頃はおじいさんを父と
思っ
て育った。戦争時代に生まれ、物心ついた三、四歳頃から、
父のいない不思議さや寂しさを持つことが始まった。父親がいな
いことを不思議に思い尋ねたら、お前の父はこの墓だと教えられ
た。「戦死」したから仕方ないと教えられた。おじいさんは学歴
はなかったが、自力で学び、亡くなるまで村の役を務めた。

姉ふいさんは和歌山県護国神社に集団参拝

健さんの姉、ふいさんは一九四四（昭和一九）年一〇月に和歌
山県護国神社に国民学校五年生時に「靖国の遺児」として参拝し
た。村から三名の遺児が参拝した。役場の職員に連れられ、祖父
が丁寧に書いた名札と黒色の紋章を胸に付け、草色のリュックサ
ックを背負い出発した。そのリュックは健さんが小学校入学時に
叔父さんからお祝いにもらったもので、姉の参拝用に健さんの名
前を消して使われたことがとても残念だった。健さんが遺児参拝
の経験がないのはまだ幼く参拝の対象者でなかったからだ。もし
姉と同様の年齢なら、「靖国の遺児」として騒がれただろう。

戦前の靖国神社遺児参拝は、一九三九（昭和一四）年から始ま
り一九四三（昭和一八）年まで続けられたが、戦況の悪化と空襲
の激化で、一九四四（昭和一九）～一九四五（昭二〇）年は各県
の護国神社参拝にかわった。

叔父さんは中国に出征

健さんの叔父さん（父の弟）は、健さんが入学したはじめての
夏、一九四四（昭和一九）年八月に召集令状が来て、中国に出征
した。父のいない健さんは叔父を頼りにしていたので、送り出し
た後が寂しく、不安であった。学校の東側に東方遙拝所があり、
その手前に小さな銃器庫があった。その壕の天井がカマボコ型で、
隊列の式台に利用されていた。叔父さんはこの指揮台の側で挨拶
をし、日の丸の小旗を振って送り出された。九月の新学期、初め
て書いた軍事郵便の葉書に、習いたてのカタカナ文字を並べて書
いたが、届いたかどうか不明だった。叔父は一九四六年中国から
復員した。叔父はマラリア熱を持って帰り、数年苦しめられたが、
頼りにしていた叔父だったので、家族は大変に喜んだ。

伯父さんは樺太でシベリア抑留

健さんの伯父さん（父の兄）は北海道の十條製紙に勤めた。祖
父母に会いに帰った数日後、樺太に帰る途中に青森駅で召集令状
の電報を受けた。一九四五年一月に樺太の守備隊に入隊した。敗
戦と同時にシベリアに抑留され一九四六年春にわが家に帰って来
た。シベリヤ抑留は、毛布一枚しか支給されず、兵士仲間で抱き
合って暖をとった。樺太に残された叔父の家族は、終戦直後に逃
避行を重ね、伯母は断髪、男装状態で生家のある北海道釧路へ子
どもたちと四人で逃げ帰った。

退職後、父が戦死した山西省の地に立つ

健さんは教員退職後の二〇〇五年九月、旅行社の集団に入れてもらい、お父さんが戦死した中国の地に立った。父が戦死した場所までは行けず、離れた地、砂漠と尾根を仰ぎ見て線香を供えた。やっと諦めることができた。砂漠の石を持ち帰り、母に渡した。

健さんの聞き取りは昨秋だったが、その後、今年、正月に入って、私に父が戦死した地、武漢を訪ねる機運が訪れた。私の友人でNさんという、大阪の北摂地域で教科書採択問題を一緒に取り組んできた仲間がいる。彼を中心に複数の仲間と今秋に武漢の地を訪ねる計画が生まれた。Nさんは中国現代史に詳しく、中国語に堪能。年に何度も中国を訪ねている。彼を中心に取り組みが開始され、今秋に武漢へのツアーが実現しそうだ。

慰霊碑の建立と慰霊祭

殿原区では、遺体を埋葬した場所に墓標と十字架が立てられた。戦時下の四五年六月九日には、地元上山路村の村長、助役、警防団長、区長らが参列し、第一回の慰霊祭が行われた。その後も毎年欠かさず慰霊祭が続けられている。二〇二五年五月五日に行われた第八一回慰霊祭には約一五〇人が参列し、米兵の冥福と恒久平和を祈った。

慰霊碑は、敗戦から二年後の一九四七年一月に墜落現場に建立された。高さ一九五センチ、幅九〇センチ、厚さ一〇センチの碑には「戦没アメリカ将士之碑」と刻まれ、幅一一〇センチ、奥行き一〇〇センチ、高さ二〇センチの台座も設けられた。同年一

二月の除幕式には、県知事、

田辺市長、和

歌山市長、龍

神村長、御坊

土木出張所長、

村内の学校長

らが出席。慰

霊碑の建立と

除幕式の費用

には総額約七万円が投じられた。当時の大学卒の初任給が二二〇

円、米六〇キロが七〇〇円だったことを考えると巨額の予算であ

った。

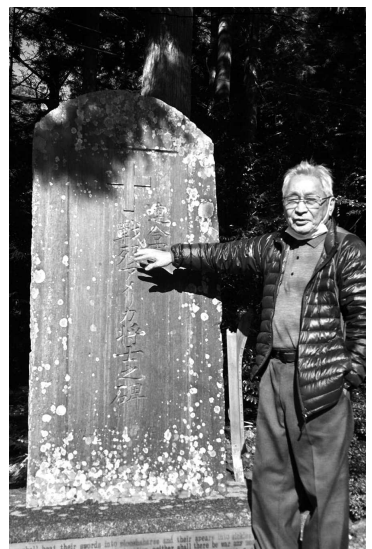
慰霊碑は当初、墜落現場にあつたが、水害や道路改修などで移

転を繰り返し、一九九三年（平成五）から現在の宮ノ尾地区にある殿原惣大明神の隣に移された。

遺体に投石した記憶と戦死したアメリカ兵の遺族探し

健さんは、自ら中国に行った経験から、B29搭乗員の遺族も同じ思いや願いを持たれているだろうと想像した。彼らも「その場」に立つことで、やつと死を納得して受け止めることができるのではないかと健さんは思った。そう思うと、B29搭乗員の戦死の状況を家族に知らせることは、自分の責任のように感じた。そして悩みながらも、たくさんの人達の協力を得て、B29搭乗員の遺族探しが始まった。

二〇一三年一〇月六日、健さんは、トーマス・クロークの妹、



健さんと「戦没アメリカ将士之碑」

エリザベス・クロックさんを、フロリダ州、サラソータ、ブラデントンに訪ね、健さんと感動的な出会いになった。(この一部始終は映画「轟音」の中で、大阪芸術大学生が撮影している。)

「トーマスは七歳上の優しい兄であり、週末に帰って来た時も外出の際には一緒に連れて行ってくれた。アイスソーダを買ってくれたり、テニスを教えてくれたりした。彼は大学の部活でもリーダーだった。」

「トーマスがサイパンに派遣されていたことはもちろん知っており、彼からよく便りがあった。しかし、ある時から彼から便りが途絶え、郵便配達人が電報を持って来た日のことが忘れられない。電報は今も保存している。本当に悲しく家族全員うちのめされた。(その電報が公式にもたらされる戦死の報だった。)」エリザベスさんは、二〇一四年五月二〇日に亡くなった。

終わりに

古久保健さんの戦中、特に少年時代の経験、そして健さんの父や戦争中の家族の経験、戦後の米軍兵士遺族との出会い、そして戦死した米軍兵士への慰霊の取り組み、などを辿ってきた。

私がそれらのなかで一番関心を持ったのは、冒頭のB29撃墜事件を目撃した健さんの体験であり、それが中国の山西省で戦死したお父さんの存在、そして私と同様、この世に生を受けたときに、父に「顔もみてもらっていない」という、悲しい体験の共通性であった。

今回はその点に注力して考えた。言い換えれば、おたがいの人生を決定した「父の不在」が規定要因だった。

米兵の慰霊は戦後、殿原地区で健さんを中心として区で取り組まれた。米兵への慰霊、「敵兵」を村民挙げて慰霊するという事例は全国的に見て皆無である。今回、私の力量では書き切れなかったが、戦死した米兵の遺族捜し過程を、ぜひ『轟音―その後―』(日本機関紙出版センター)で読んでいただきたい。

健さんは、戦後、米兵の慰霊と顕彰の取り組みを教え子たちに継承した。現在、三人の教え子とその継承者として受け継いできている。健さんは「自分のやって来たことは間違いなかった。戦争は現在にも続いている。体験の継承が今の時代に大変重要だ。」と言う。

これまでのこの連載は、「靖国遺児参拝 戦前と戦後の連続」というサブタイトルで続けてきたが、今回はそのタイトルを外した。健さんのお姉さんは和歌山県護国神社参拝をしているが、また健さんはまだ護国神社参拝の該当年齢ではなかった。そういう意味では、ふいさんと健さんは「護国神社参拝の同時代人」であり、戦争で苦勞をともにされたご家族も「同時代人」であったと言える。



健さんと久代さん 自宅にて